

石野貴之が電撃復帰

昨年10月の戸田ダービーを最後に長期欠場していた石野貴之が、2月6日の住之江一般戦で電撃復帰した。

石野は昨年の春頃から膝の悪化に悩み、ついには手術を決断。手術は無事に成功しリハビリに励み、医師から復帰は3月中旬と言われていたので正規あっせんは3月22日の芦屋一般戦からだった。

しかし、回復が本人が思っていた以上に早く、早期の復帰を決断。2月6日の住之江に追加で参戦すると、2月14日からの尼崎、2月20日からの住之江と立て続けに追



加参戦。2節目の尼崎(6着)と3節目の住之江(2着)では優出も果たした。

早期復帰の最大の理由は言うまでもなくA1級の確保。出走回数90走をクリアするための決断だ。今年のSGにはオールスターとグランドチャンの出場は濃厚でメモリアルもほぼ大丈夫だろう。オーシャンカップとダービーの出場は厳しい状況ではあるが、SGに3回出場してGIも走れば、チャレンジングカップ、そして年末のグランプリ出場への道筋も見えてくる。

土屋千明・智則がGI準優で激突

戸田関東ダービー準優で土屋千明・智則の姉弟対決が実現した。しかも、智則が予選トップの1号



艇、千明は予選6位で2号艇と好枠を独占。千明はエース機が味方の大活躍だったが、智則は準優でその姉を破って逃げたことで、優勝は自信を持って走れたとか。

土屋姉弟の直接対決は通算6回目、GIでは21年2月多摩川関東ダービー3日目5R以来2回目。この時も1号艇だった智則が逃げて勝利しており、通算でも弟が5回先着している。

GI以上における準優、優勝戦の兄弟姉妹対決は96年以降で13回ほどあり、そのうち11回が篠崎元志・仁志の対決。篠崎兄弟は優勝戦でも15年福岡周年、16年芦屋周年と2回の直接対決がある。篠崎兄弟以外は98年児島周年準優の林通・貢兄弟と07年徳山レディースチャンピオン優勝戦の池田明美・浩美姉妹だけだった。



マクールトピックス

實森美祐が男女混合 GI初優出

實森美祐が徳山中国ダービーで、男女混合GI初優出を達成した。予選を10位で通過し、準優は12Rの4号艇で登場。2コースの藤原碧生がFでイン茅原悠紀をまくる展開を見事にとらえ、茅原の猛追を振り切って2着を守り切った。ただ、優勝戦も同じ4号艇だったが展開が向かず6着と敗れている。

地区ダービーでは毎年のように女子が活躍。昨年は四国で松尾夏海、2年前は中国で守屋美穂が優出しており、これで3年連続で女子が優出となった。GI以上の男女混合戦における女子の優出は實森美祐で24人目(草創期を除く)。ちなみに最多は日高逸子の7回で横西奏恵が5回。



大庭元明、飯山泰が 2000勝

1月31日の津一般戦最終日11Rでボンコツ会会長の大庭元明が史上186人目となるデビュー通算2000勝を達成した。93年11月に若屋でデビューして以来、31年2か月、8010走目での達成。

内訳はSG0勝、GI34勝、GII3勝、GIII157勝、一般戦1806勝。福岡支部では24人目、73期では荒井輝年に続く2人目。大庭はSGの出場がないが、SG未出場で2000勝達成の選手は非常にレア。186人中、数人しかおらず、最近では鈴木博や富山弘幸も当てはまる。

また、2月22日の蒲郡一般戦最終日5Rで飯山泰が187人目となるデビュー通算2000勝を達



大庭元明



飯山泰

成した。97年11月に多摩川でデビューして以来、27年3か月、7161走目での達成。

内訳はSG46勝、GI245勝、GII37勝、GIII158勝、一般戦1514勝。東京支部では12人目、81期では佐々木康幸、池田浩二に続く3人目。

飯山はSG出場33回、GIは3回の優勝を誇る。

栗原謙治がスタート 無事故3000走

2月19日の若松一般戦4日目1Rで、群馬のベテラン栗原謙治が史上32人目となるスタート無事故3000走を達成した。

栗原が最後に切ったFは10年1月の25日の若松なので15年1か月で達成。実はこの若松のFの時も

大寒波の影響はボート界にも 津GIは短縮開催に

2477走スタート無事故を続けていた。このFがなければ間もなく河合三弘の5959走に届こうかというくらいFが少ない(通算8本)。

そういうわけで栗原はスタート無事故2000走を2回達成したことになるが、これは歴代でも加藤峻二、吉野光弘、水長照雄、椎名政浩、深井利寿の合計6人しか達成していない記録でもある。

1月末から2月にかけての日本列島は幾度となく大寒波に見舞われ、それが我がボート界にも多大な影響を与えた。

2月上旬は全国地区ダービーの開催時期でさらに影響が大きかったのだが、もっとも影響があったのは2月3日からの津東海ダービー。3日の初日こそ開催されたが4、5日と順延になって6日も中止。7日の2日目は予定されていた12Rのドリーム戦がなくなり、8日の3日目は3R以降が中止。予選は全部で26レースしか消化できなかった。GIにおける短縮開催は99年住之江高松宮記念以来の珍事となった。

三国の近畿ダービーは5日の4日目5R以降が中止となって1日順延。津とは逆のパターンで予選が52レースに増えた。丸亀四国ダービーは5日の2日目が中止順延。7日の3日目が7R以降中

止で予選は6レース分少なくなつた。戸田関東ダービーは5日目の準優日が1日順延。徳山中国ダービーと大村九州ダービーだけは順延も中止もなく、順調に日程を消化した。

一般戦では1月26日からの若松ミッドナイトが影響を受けた。ともに開催できたのは26日の初日と30日の最終日の2日だけ。27日と29日は全レース中止、28日は2R以降が中止となつて、予選は全部で13レース。それでも優勝戦は得点率上位6人で行われ、6人中、5人が完全Vに王手という状況が生まれた。初日連勝の井口佳典が1号艇だったが敗れてしまい、予選1走1着だった宮本夏樹が5コースからまくり差して優勝。2戦2勝の完全V? という恐らく史上初であろう珍事となつている。

藤原碧生、田口節子がGI準優でF

2月12日の徳山中国ダービー準優12Rで、最優秀新人の藤原碧生が2コースからコマ01のFを切った。罰則規定ありのFは初めて。3月3日からの尼崎周年は走るが、F休み明けから半年間はGI・GIIを走れないので、ヤングダービーの出場はアウト。記念戦線への復帰は最速でも10月31日からの多摩川周年になる。

2月23日の浜名湖スピードクイーンメモリアル準優12Rでは田口節子が4コースからコマ01の



藤原碧生

F。田口はこれまで優勝戦で5本、準優では4本のFがあり、女子レースの罰則規定は何度も掛かってきたが、GI準優のFは初めて。記念戦線への復帰は10月以降になり、5月のレディースオールスター、8月のレディースチャンピオン出場はアウトになったほか、休み明けから3か月は女子レースも走れない。

SG覇者の矢後剛が引退 川上昇平は養成所教官へ

1月末から2月にかけて次の6選手が引退した。

- 矢後 剛(東京58歳62期)
- 大賀広幸(山口57歳65期)
- 川上昇平(長崎55歳67期)
- 岸 恵子(徳島52歳73期)

浦上拓也(大阪52歳80期)
切田潤二(山口51歳73期)

矢後剛さんは88年5月デビューの62期では唯一のSG覇者。予備から繰り上がり出場した00年浜名湖クラシックでイン逃げ優勝。予選中は1号艇でもインに入つておらず、準優も2号艇から6コースに出たの1着だったが、優勝戦は風速9メートルの強い追い風が吹く荒れ水面。安定板装着でインを主張し、まんまと逃げ切った。また、唯一のGI制覇は05年の津周年。ここはクラシックとは真逆で、準優はインから勝つたが2号艇になつた優勝戦はチルト3度で6コースを選択し、濱野谷憲吾、山崎智也らを相手のまくり勝ちだった。

静岡出身で後に東京支部へと転籍。出世は決して早い方ではなかったが、5年目からA級に定着し、9年目から20年以上、ほぼA1級をキープ、自己最高勝率は00年後期の8・01。SG出場は46回で優出も5回あるが、クラシック制覇



矢後剛

の00年もグランプリ出場には届いていない。この当時はSG制覇イコールグランプリ出場の図式はなく、この年は矢後と共にダービー制覇の池上裕次もグランプリには出場できなかったほど。グランプリ出場枠が12人の時代、SGを勝つた年にグランプリに出場できなかった選手は全部で15人いる(最後が13年の森高一真)。

通算成績は8372走で勝率6・38、1784勝、優出276回、優勝44回。生涯獲得賞金は約11億2963万円。現役最後のレースは昨年8月2日の下関。指の負傷で長期欠場していたが、復帰することなく引退となった。

大賀広幸さんは寺田千恵らと同期で89年11月にデビュー。3期目にA級に昇格するなど出世は早く、自己最高勝率は07年後期の8・10。勝率8点台は4期ある。SG出場は38回で優出は3回。GIは22回の優出で3回の優勝がある。10年に股関節の難病・大腿骨頭壊死症を発症し、約2年間の長期欠場を経て復帰という試練も経験した苦労人もあった。通算成績は6968走で勝率6・75、2089勝、優出279回、優勝82回。生涯獲得賞金は約10億2566万円。現役最後のレースは1月22日の地元徳山。

川上昇平さんは90年11月デビューで市川哲也らと同期。4年目にA級に定着すると通算23期A1級に昇格。自己最高勝率は96年後期の7・55。唯一のSG出場は00年の若松メモリアル。GIは2回の

優出があったもののタイトルには届かなかった。通算成績は8316走で勝率5・78、1881勝、優出200回、優勝36回。生涯獲得賞金は約7億9262万円。現役最後のレースは1月24日の地元大村。4月からは定年を迎えた山崎昭生さんと入れ替わる形で、ポイントレーサー養成所の実技教官になることも発表されている。

岸恵子さんは93年11月デビューで荒井輝年らと同期。初のA級昇格に10年、A級定着には15年ほど費やしている遅咲きの花ではあったが、A1級には7期昇格し自己最高勝率は18年前期の7・02。14年下関の記念すべき第1回レディースチャレンジカップの覇者。GIでは13年鳴門四国ダービーと17年若屋レディースチャンピオンで優出がある。通算成績は6201走で勝率5・43、1244勝、優出89回、優勝9回。生涯獲得賞金は約4億9124万円。現役最後のレースは1月10日の大村。



川上昇平

は6期昇格しており自己最高勝率は11年後期の6・52。GIは6回の出場があり3回予選突破しているが優出はなかった。通算成績は6585走で勝率5・38、1119勝、優出71回、優勝5回。生涯獲得賞金は約5億172万円。現役最後のレースは2月9日の宮島。

切田潤二さんは93年11月デビューで岸恵子さんらと同期。A1級には3期昇格し自己最高勝率は01年前期の6・46。GIでは01年徳山中国ダービーで唯一の優出がある。通算成績は6221走で勝率4・79、694勝、優出46回、優勝3回。生涯獲得賞金は約4億4877万円。現役最後のレースは1月26日の住之江。兄貴分だった大賀広幸さんと同じ1月31日に引退届けを出している。

選手の負傷情報

高石梨菜 1月28日丸亀一般戦4日目7Rの1周1マークで転覆。左示指手根中手関節脱臼骨折・中手骨、左中指CM関節脱臼、左示指開放骨折、左環指中手骨骨折、左環指切断で全治見込みは未定。
中澤宏奈 2月7日江戸川ヴィーナス4日目6Rの1周1マークで失速し後続艇と接触して落水。左橈骨遠位端骨折で全治見込みは2か月。

常滑の初優勝シリーズは三浦洋次郎がV

出場選手全員が優勝未経験で誰が優勝しても初優勝者が誕生する企画レースは大村が04年から開催。7年目の10年からは男女Wの女子戦の方になり、18年の津田裕絵を最後に開催しなくなった。

しかし、江戸川(3回)、津、びわこ(各1回)、児島(2回)、常滑が受け継ぎ、23年までに全部で25回も開催された。ところが昨年は開催なし。今年もそれっぽいタイトル名の開催が見当たらず、2年連続未開催かと思いきや、2月8日からの常滑「にっぽん未来プロジェクトinとこなめ」が、優勝未経験選手ばかりのレース。2年ぶりにひそかに復活していた。

優勝したのは地元の三浦洋次郎。初ドリム戦は1号艇に指名されており、V候補筆頭では

表1 大村以外の初優勝シリーズ優勝者

江戸川「誰が勝ってもデビュー初優勝」				
1	2015/07/20	森作 広大	1	逃げ
2	2016/11/12	山口 隆史	4	恵まれ
3	2017/11/20	北山 康介	3	まくり差し
津「初優勝は誰だ!!」				
1	2016/09/18	三宅 潤	2	差し
びわこ「初優勝争奪」				
1	2017/01/25	宮下 元胤	2	恵まれ
児島「誰が勝っても初優勝」				
1	2021/02/19	山本景士郎	1	逃げ
2	2022/02/14	外崎 悟	1	逃げ
常滑「目指せ!初優勝」				
1	2020/02/11	藤山 翔大	1	逃げ
2	2021/02/16	庄司 孝輔	2	まくり
3	2022/02/07	森作 雄大	4	まくり
4	2023/02/13	原田才一郎	1	逃げ
5	2024/02/11	三浦洋次郎	5	差し

ただし5回目は初優勝のサブタイトルなし

今月の水神祭

日	選手	期
2月9日	齊藤 廉	(福岡)134期
2月18日	小林 礼央	(広島)134期
2月23日	増本 杏珠	(福岡)134期
(GI初勝利)		
2月2日	篠田 優也	(兵庫)108期
2月4日	小池 哲也	(大阪)113期
2月4日	馬野 耀	(大阪)120期
2月4日	田村 慶	(徳島)127期
2月5日	山田 晃大	(滋賀)112期
2月6日	佐藤 悠	(福井)118期
2月6日	西岡 顕心	(香川)129期
2月7日	中野 仁照	(愛知)128期



三浦洋次郎

あったものの優勝戦は5号艇。しかし、向かい風10メートルで安定板装着の2周戦というコンディションが味方、バックは最内を差して5番手だったが、先行艇が強い追い風の2マークで流れる中、クルッと小回りして逆転勝ち。29回目の優出で悲願の初優勝を達成した。三浦はペラをたたかない希少なノーハンマー戦士で、ペラに合わせて乗り方を変えるタイプ。



表2 グラチャン出場権争い

※登番黄色はクラシック出場選手

順位	登番	選手名	支部	得点
前V	4362	土屋 智則	群馬	147
優先出場	3941	池田 浩二	愛知	239
	4238	毒島 誠	群馬	225
	4851	関 浩哉	群馬	224
	4262	馬場 貴也	滋賀	221
	4444	桐生 順平	埼玉	189
	4418	茅原 悠紀	岡山	156
直前SG(オールスター-V)				
9	4320	峰 竜太	佐賀	241
10	4573	佐藤 翼	埼玉	241
11	4205	山口 剛	広島	233
12	4445	宮地 元輝	佐賀	226
13	4337	平本 真之	愛知	214
14	3783	瓜生 正義	福岡	192
15	4371	西山 貴浩	福岡	189
16	4504	前田 将太	福岡	183
17	4719	上條 暢嵩	大阪	183
18	3942	寺田 祥	山口	170
19	4459	片岡 雅裕	香川	170
20	4586	磯部 誠	愛知	170
21	4030	森高 一真	香川	163
22	3959	坪井 康晴	静岡	162
23	4168	石野 貴之	大阪	158
24	5121	定松 勇樹	佐賀	153
25	3978	齊藤 仁	東京	119
26	4494	河合 佑樹	静岡	101
27	4787	椎名 豊	群馬	76
28	4397	西村 拓也	大阪	56
29	4350	篠崎 元志	福岡	220
30	4524	深谷 知博	静岡	163
31	4685	島村 隆幸	徳島	157
32	3415	松井 繁	大阪	156
33	3854	吉川 元浩	兵庫	147
34	4831	羽野 直也	福岡	146
35	3946	赤岩 善生	愛知	130
36	4932	新開 航	福岡	127
37	4503	上野真之介	佐賀	124
38	4500	山田 康二	佐賀	123
39	3897	白井 英治	山口	122
40	4266	長田 頼宗	東京	120
41	4502	遠藤 エミ	滋賀	118
42	4939	宮之原輝紀	東京	103
43	4013	中島 孝平	福井	102
44	4024	井口 佳典	三重	101
45	4686	丸野 一樹	滋賀	91
46	4166	吉田 拓郎	岡山	90
47	4760	山崎 郡	大阪	88
48	4547	中田 竜太	埼玉	87
49	4344	新田 雄史	三重	82
50	4762	藤原啓史朗	岡山	78
51	4546	浜田亜理沙	埼玉	74
52	3716	石渡 鉄兵	東京	71

順位	登番	選手名	支部	得点
53	3779	原田 幸哉	長崎	62
54	4914	吉田 裕平	愛知	62
55	4497	桑原 悠	長崎	59
56	3780	魚谷 智之	兵庫	55
57	4847	佐藤隆太郎	東京	55
58	4044	湯川 浩司	大阪	54
59	5084	末永 和也	佐賀	53
60	4398	船岡洋一郎	広島	51
61	4364	池永 太	福岡	50
62	4050	田口 節子	岡山	49
63	3721	守田 俊介	滋賀	48
64	3908	重成 一人	香川	47
65	4290	福田 浩二	兵庫	45
66	3719	辻 栄蔵	広島	45
67	4477	篠崎 仁志	福岡	44
68	4208	三浦 永理	静岡	42
69	4237	大峯 豊	山口	42
70	4961	西橋 奈未	福井	41
71	4482	守屋 美穂	岡山	40
72	3744	徳増 秀樹	静岡	38
73	4361	柳生 泰二	山口	37
74	3952	中澤 和志	埼玉	34
75	4736	高倉 和士	福岡	32

2月7日	山田	理央(香川129期)
2月8日	柳内	敬太(兵庫113期)
2月9日	野田	彩加(山口126期)
2月10日	川井	萌(静岡127期)
2月10日	水谷	理人(香川132期)
2月11日	高岡	竜也(山口119期)
2月11日	清水	愛海(山口127期)
2月13日	坪口	竜也(長崎104期)
2月19日	山下	夏鈴(三重121期)
2月20日	富樫	麗加(東京112期)
2月20日	山本	梨菜(佐賀120期)
2月21日	武井莉里佳	(兵庫128期)
2月22日	蜂須	瑞生(群馬114期)
2月22日	戸敷	晃美(福岡118期)
2月23日	神里	琴音(福岡128期)

(初優勝)
1月28日 西丸侑太郎(香川130期)
2月11日 三浦洋次朗(愛知110期)
(GII初優勝)
2月1日 佐藤 翼(埼玉105期)

2月は地区ダービーと新設のPGIスピードクイーンメモリアルが開催されたので、GI初勝利の選手が一気に23人！ 最年長は104期の坪口竜也で、最若手は132期の水谷理人。そのキャリアには14年もの差がある。
デビュー2期目の134期から3人が水神祭。齊藤仁の息子・廉

は地元の若松。6コースからまくり差しで勝ち、3連単は30万円台の大穴を提供したが、翌日にもすぐさま2勝目を挙げて初の予選突破も果たした。小林礼央は徳山でエース機をゲットし、6コースからのまくり差し。予選は突破できなかったが、2着3本、3着も1本と活躍した。増本杏珠は大村一般戦の女子番組で3コースからのまくり差し。翌日も女子番組で同じ3コースからすぐさま2勝目をマーク。2日連続で3コースから見事なハンドルを披露した。
134期はこれで9人が水神祭を済ませたが、デビュー期の135期は宮崎心之介1人だけと非常に厳しい状況になっている。
初優勝は三浦洋次朗以外に西丸侑太郎。2回目の優出だった江戸川で3コースから握って回り、江戸川巧者の湯川浩司のイン戦を撃破した。130期では藤原仙二に続く2人目の優勝者。それにしても香川支部は西岡顕心や水谷理人らに続いて、次々と楽しみな若手

が出てくる。西丸も5期目にしてA2級に昇格したばかりだった。

戸田グラチャン選考順位

6月24日から戸田で開催されるグラチャンの最終選考は若松クラシック。SG優出で出場確定は27人。得点上位でクラシックにも出場する新田雄史や石渡鉄兵あたりまで大丈夫そうな雰囲気。クラシックには出場しない山崎郡、中田竜太、藤原啓史朗、浜田亜理沙の4人がピンチな状況。中田と浜田の夫婦は地元SGだけに何としても出場したいところだが...
選考順位が53位以下でクラシックに出場する原田幸哉と吉田裕平は得点で逆転出場が可能だが、佐藤隆太郎以下のクラシック出場組は優出条件になる可能性が高い。
中田、浜田夫婦がピンチの地元埼玉勢は桐生順平と佐藤翼の2人だけが当確。